

台湾のポスト植民地期(1945-50)における文学

——異文化接触とステレオタイプの形成——

丸 川 哲 史

(要約)

本稿は、1945年から1950年までの光復初期における台湾文学を対象とするものである。この時期は、日本の植民地統治の影響から離脱しようとする時期として、ポスト植民地期と呼ぶことが出来るだろう。この時期の台湾文学は、国民党の統治の失敗や大陸中国における国共内戦の深化によって、多くの作家たちに多大な文化的動揺を与えたと言える。本稿は、この時期の文学の中でも、特に今日の省籍矛盾に通じる異文化接触的局面を持つ作品を扱うものである。特に材料として扱うのは、①国民党軍がはじめて台湾に上陸したときの光景の記事、②呉濁流の「ポツダム科長」における外省人男性についてのステレオタイプ、③呂赫若の「冬夜」における女性の表象——などである。本稿の狙いとするのは、この時期に徐々に出てきた省籍矛盾にかかわるステレオタイプの形成を分析することである。そしてさらに、その異なるエスニックの出会いという主題が、ジェンダー的表象に翻訳される在り様を検討しながら、そこにどのような文化的ヘゲモニー関係が関与しているかを考察するものである。

第1節 前提

1947年6月に発行された『台湾年鑑』(台湾新生報社)の文化欄は、光復(中国への復帰)後の台湾における文学活動の有り様について、「光復以後、台湾文学は、いまだ不毛である」との評価を下している。この欄の筆者である王白淵は、その不毛の原因として、①書き言葉の切り替えの問題、②政治権力と表現の自由との問題、③経済的危機から来る出版業界の不振——の三点を上げている。光復以後の国民党政権による二・二八事件などを経た権威主義的体制の確立という史的展開からすれば、この時期の台湾における文学的不毛をもたらした主たる原因としては、現在の了解からすれば、①の問題が潜在しながら、専ら②の「政治権力と表現の自由の問題」に求められるように思われる。

台湾は、1945年8月15日に光復した時点から、日本植民地統治からの、いわゆる脱植民地化が運命づけられたと言える。光復当初、文学を含めた出版ジャーナリズムは、総合文化雑誌『台湾文化』の創刊(1946/9/15)に見られるように、次々と息を吹き返し、脱植民地化を進める政治的意図への濃厚な期待が反映されていたものの、同時にそういった脱植民地化の流れの先には幾つかの壁が立ちふさがっていた¹⁾。光復初期の時期とは、むしろ台湾の光復が孕み持っていた構造的矛盾が明らかになっていくプロセスでもあった。台湾における脱植民地化の課題とは、もちろん日本統治下における植民地状態からの回復ということであるが、大陸中国との関係で言えば、台湾の脱植民地化とは、何よりも台湾の中国化という課題を担うものでもあった。つまり、台湾の歴史区分として採用される光復とは、台湾が中国の一部として復帰したということであるが、そこでは、まさに脱植民地化の中身と、脱植民地化を担う主導権の問題が、当初の段階では

十分に意識されていなかったということがある。ここで容易に想像されるのは、政治的要素、経済的要素、文化的要素と粗く分けた場合に、特に文化的要素における脱植民地化という課題に、最もデリケートな部分を含まざるを得なかったと言える。まさにこの時期に、この文化的要素(台湾における日本の残滓)の脱植民地化をめぐる混乱が見られたことは、予想に難くないことである。大雑把に言えば、台湾における日本統治の経験は、1945年以前からの台湾居住者(本省人)のものでありながら、それを脱植民地化して行く主導権は、主に植民地の経験ではなく抗日の経験を柱とする、1945年以降からの台湾居住者(外省人)の方にあったということ。さらに脱植民地化のプロセスは、二・二八事件による混乱や国共対立の余波を受けながら、結果として、国民党政権の白色テロが強制した沈黙によって、十分な発展を見せられなかったと言える。1947年の二・二八事件、そして白色テロの開始を告げる1949年4月9日に起きた四・六事件²⁾、さらに同年12月10日の中華民国政府の正式な台北への移転から、1950年6月の朝鮮戦争勃発に付随する太平洋第七艦隊による台湾海峡の封鎖まで、幾つかの段階を経て、台湾では、大きく表現の自由が制約されることになる。そして、この1950年をメルクマールとして、1940年代後半の文化的営為にかかわる記憶は、いわば地下水脈化されて行ったものと考えられる。

歴史的に見て、この混乱期、つまり1945年の光復から1950年までの記憶が、今日の台湾の政治文化にも大きな影を投げかけているわけであるが、同時にこの時期の経験については、未だに語り尽くされていない観もある。本稿の道筋は、この時期の文学テキスト及び評論テキストなどに依りながら、当時の男性文学者の有り様、主にその無意識的な情動の部分进行分析するものである。ここで対象を男性文学者と限定した理由は、女性の作家、文学者が出版公共圏に登場していなかったという意味もあるが、台湾におけるポスト植民地期の有り様を考察する上で、男性文学者の想像空間の中に、見逃すことのできないジェンダー表象とエスニシティとの間の比喩的關係が散見されるからである。

さて、ここでのジェンダーの定義については、ジョン・W・スコットの「ジェンダーとは、肉体的差異に意味を与える知である」に依ることとする³⁾。しかし、スコットの議論は、単純に、「自然としての性(セックス)」／「文化としての性(ジェンダー)」といった区別をつけることに終始するものではない。スコット自身「ジェンダーがセックスを反映しているとか、その上に課せられていると言うことはできず、むしろセックスの方がジェンダーのもたらした一つの結果となる」とも述べているからである⁴⁾。スコットの議論は、明らかにフーコーが『性の歴史Ⅰ』で述べているような、セックスとジェンダーの配置の遠近法的倒錯——「性的欲望の(sexualite)の装置が、その様々な戦略において『前提となる性』という考え方を設置する」——を意識したものである⁵⁾。つまり、文学者の現実の身体的性別と、それらの文学者が表現したテキスト内部において生産される登場人物のジェンダーは、一定程度区別される必要が出て来るにもかかわらず、やはりエクリチュールの水準において、異性愛としての男／女の「性」が、かなり意識的な政治的寓話でありかつ、それがまさに自然な過程としての「性」として表現されるのである。

またこのことと関連して、当時の男性文学者が、当時の水準においては当然のことながら、特権的に出版公共圏における発言権を省籍の区別を超えて独占していたことも、予備知識として記

憶に留められるべき事柄であるだろう。この時期の台湾の出版公共圏において、女性はまだ一部の読者にすぎず、作品を創作する主体としては、未だ登場していなかったと言える⁶⁾。つまり、現に存在する文化的主体としての女性の批判的な眼差しに、この時期の文学は、曝されていなかったのである（このことは、今日にも続く課題でもあろう）。

この時期の男性作家による小説の中には、頻繁に女性の表象が登場するわけであるが、この「女性」（以後ジェンダー論的に女性を表現する場合には、「女性」と鍵括弧を付けることにする）は、植民地化された場としての台湾の表象であるという解釈を概ね許すものである。なぜ、男性文学者は、台湾という場所をジェンダー化（「女性」として）して表現しようとしたのか——そこから浮かび上がって来る男性文学者の無意識の構造を、「女性」を分析する中で探求することができる。さらに、このポスト植民地期において現れた問題は、また、大陸から来た人々をどのような構えの中で表象するか、ということとも重なっていたようである。この時期を過ぎた多くの本省人男性において、特に1947年の二・二八事件前後の時期は、日本の植民地統治からの脱植民地化の過程でありながら、それ以上に、国民党による独裁的統治の全般化として映っていたはずである。つまり、この時期の小説テキストには、少なからず、本省人女性以外にも外省人（1945年以降台湾にやって来た人々）の表象、またそれに先立つ日本人の表象が生産されており、そういった意味で、この時期の文学テキストは、異文化接触によって生産されるステレオタイプにかかわる素材として設定し得るものなのである。この場合、エドワード・サイードが、その主著『オリエンタリズム』の中で、「通常表象というものがそうであるように、それが特定の歴史的・知的・経済的背景のなかで、ある傾向に従って、ある目的のために作用している」と述べていることは、非常に示唆的である⁷⁾。本稿の目的は、光復初期にかかわるステレオタイプの表象を分析することによって、むしろその表象を当時の文化－歴史的力関係（ヘゲモニー）の方に投げ返すことにある。

第2節 光復初期のステレオタイプの形成

1970年代に陳映真、王拓、余光中、王文興などの間で交わされた、いわゆる郷土文学論争は、1987年の戒嚴令解除に繋がる台湾社会の民主化、本土化の流れの中でしばしば言及されて来たものである。この論争において隠れたテーマとなっていたのは、台湾人のアイデンティティーの錯綜をめぐるものだったと言えよう。この時期の論争について、松永正義は、このように触れている。「それは『中国』を切り離した台湾ナショナリズムでも、『台湾』を遅れたもの、不純なものとしてしりぞける中華主義でもない、まず台湾に土着するところから、中国を含めて世界に開いて行くもので、未来に向けてのものである」と⁸⁾。しかし、事態は、1987年の戒嚴令の解除を経て、陳映真と王拓との決別に見られるように、民主化の一定の定着とともに、一般的には、やがて台湾ナショナリズムと中華ナショナリズムとの分岐といったような、単純な見取り図が引かれて行くようになっている。

*

本論の目的の一つは、このような台湾人文学者におけるアイデンティティーの分岐の由来を、さらに光復直後の時期に遡って解析しようとするものである。試しに光復直後において、台湾人の祖国中国への眼差しは、どのようなものであったのか考察してみる。以下に提示するのは、光復直後、まだ日本語による雑誌の発行が許されていた時期のもので、「国軍を台北駅頭に迎ふ」(原文日文)と題されたルポルタージュ風の記事である。ちなみに光復直後(1945年11月)に創刊された雑誌『新新』は、主に本省人によって主導され、1947年1月まで八号を数えた雑誌で、当時の有力な左派系文化人、蘇新、呂赫若なども参加していた雑誌である。

五十年来国軍を見ざると言う。だが我々が見たいのは現代戦に勝ち抜いた我国軍だけだ。…〈中略〉…自らの担棒で一切の所用品を担って行く。見馴れない者はおかしく思うかもしれない。見よ、担がれた物品には凡て番号があり、規格があり、組織的にできているではないか。歩武も揃い、非常に敏速でもある。機械にたよらない人間の機械化部隊。そうだ、組織的抗戦隊だ。…〈中略〉…二十年前のパルチザン赤軍がなぜ今日最強を誇るソ聯機械化兵団となったか。そうだ。建設！！⁹⁾

この記事を書いた『新新』は、1945年11月20日付けで発行されたものであるから、10月18日、初めて国民政府軍を台北駅の駅頭に迎えた本省人側の感想が、当時の雑誌発刊のスピードで言えば、ほぼリアルタイムに表現されたものとなっている。装備された物品のディテールにかかわる描写もあり、筆者が直にこの光景を見ていたことは、ほぼ間違いないものと思われる。さらに「赤軍」「ソ聯」といった言葉へのプラスの評価から連想される時代背景として、この時期の本省人文学者は、大陸中国と繋がっているという意識だけでなく、国共合作、あるいは「容共」の気分の中にあり、国民党軍、共産党軍の別に関しても未分化な理解の中にあっただようである。さらにこの同じ光景について、同様の好印象で伝えた文章では、例えば、戦前の『民俗台湾』にかかわっていた、池田敏男の『敗戦日記ⅠⅡ』(原文日文)がある。その中の、国民党軍が台北市に到着した18日の二日後、20日付けの日記で、台北駅に到着した国民党軍を迎え出た張美恵という女性からの聞き書きの部分を見てみよう。

同じ血の叫び 張美恵さん談

青天白日滿地紅の旗に彩られたプラットフォームに、待望久しかりし我が国軍を満載した列車が迂り込んだ。シュッシュッと蒸気を吐いているピストンの様に胸が波立つ。相互の体内を流れる同じ血の叫びが、私達は無言の裡にも兄弟を迎える様な親身な感じに依って結ばれる。

一体ゆったりしていて無表情なせいとか、非常に大陸的だと思った。殊に背裏につけていたから傘と、赤い花模様の魔法瓶がほほえましい。大釜、薪、野菜、洗桶、莫産等を天秤棒の両端にかけて、わざわざかついで来られたその用意周到ぶりに恐縮する。然し悠々迫らない飾り気のない、大陸的な鷹揚な態度には、私達台湾省民として、今後範とすべきことが多々あ

と思う。

お茶にお菓子の接待に、女学生は忙しそうに立廻っている。お菓子をすすめると、挙手して礼を返される。中には福建語の通じるのもいて、久しぶりに遠来の親戚に出会った様な喜びが交わされる。

ここには、二. 二八事件より前の時期、祖国復帰への喜びが直截に語られているわけであるが、後の見方からするならば、「兄弟を迎える様な親身な感じ」とする部分など、かなり鼻真目に国民党軍のことは見ていたようである。ここから類推されるのは、これほどの祖国復帰への期待とは、まずもって日本植民地時代における民族抑圧の深さから招来されたものだと言うことである。しかし後に定着したこの同じ光景に対しての評価で言えば、例えば、葉石濤の『台湾文学史綱』(原文中文)などが、ほぼ今日的に流通している標準的かつ規範的な内容を指し示している。

一九四五年十月十七日、大陸の軍隊が基隆から上陸した。台湾青年は、基隆の港に展望台を作って、日夜その台から遠くを眺めて、大陸の軍隊が一日も早く到着することを期待していた。しかし、彼らが見た七十軍は、全く軍隊としての様を為しておらず、また軍紀も良くない部隊であった。このことは、台湾の民衆に挫折感をもたらした¹⁰⁾。

この国民党軍は、時間的に見て明らかに先の二つの記事と同じ部隊のはずである。何故このように違った叙述が出て来るのか。簡単に言って、二. 二八事件を始めとする後の政治的混乱が巨大な影を落としている、ということに尽きるだろう。ただし、ここで重要なのは、どちらが正しい印象、正しい認識であったか、ということを決定的なことではない。むしろ、これらの印象の差異そのものに踏みとどまって、その表象生産のあり方そのものに焦点を当てることである。

ポスト・コロニアル批評の理論家、ホミ・K・バーバは、植民地的状況における出会いと、そこから出て来るステレオタイプの形成について「ステレオタイプは、それが、元々のリアリティーに対して偽の表象であるからということで、単純化されるものではない。…(中略)…ステレオタイプは、重層的かつ撞着的な信憑性を形づくって、差異の知識を与えるが、同時にそれを否認し、あるいは覆い隠してしまう」と述べている¹¹⁾。つまりバーバによれば、プラスのイメージにせよ、マイナスのイメージにせよ、この時期の本省人にとっての外省人とは、「他者」(差異)であり、その意味でステレオタイプの生産自体からは免れ難いものである。だから課題は、このステレオタイプの形成の由来、あるいはその構造を明らかにすることである。先の「国軍を台北駅頭に迎ふ」や『敗戦日記ⅠⅡ』の行間からは、とりあえず祖国への復帰に湧く光復直後の本省人側の興奮が伝わって来るわけであるが、それらもまた当時の文化的バイアスが掛かったステレオタイプであることに違いはない。だだしもう一方で、葉石濤の文章は、実際そうであるが、明かに既に一定の時間を経た後のものであるとの印象を受ける。葉石濤は、国民党独裁政権による文学者弾圧によって獄中生活を余儀なくされるなどの経験、つまり多くの同世代の台湾人文学者と運命を伴にしているわけであり、この記述には、明らかに後の国民党政権への批判意識がバックボーンとなっていると思われる。しかし、冷静に考えてみた場合、1945年の時点での国民政

府軍の在り様そのものと、後の国民党政権の文化弾圧との間には、直接的な関連はないはずである。後に同世代の多くの文学者は、国民党軍の装備の悪さと国民政府による非道な行為とを一つの繋がりのもとと想像して来たと言える。もちろん、そうした観念連合が成立するような局面は、現実的に多々あっただろうし、またそういった流れは、人間の経験と記憶の関係において必然的な成り行きでもあっただろう。

さて、ここからさらに分析を進める上でも、一呼吸、間をおく必要があるように思われる。光復を迎える以前の記憶、つまり、日本時代の記憶の残響が光復直後にどのように現れていたかを見て行くことにする。

第3節 「日本」というトラウマ

雑誌『台湾文化』の第一巻第二期(1946年11月5日)に掲載された楊守愚の「阿榮」(原文中文)は、実は、戦前に書かれた「鴛鴦」という短編小説の題名だけを換えたものである¹²⁾。興味深いのは、その中で、台湾人自らが経験した日本統治時代の苦悩というものが、典型的なトラウマ的表現として提示されていることである。以下そのあらすじを瞥見してみる。

植民地時代の話である。主人公の台湾人男性、阿榮は、数年前、砂糖黍を運ぶ車にひかれて左足をなくしている。現在は、妻の鴛鴦(えんおう)が、生活のために農場(会社)に働きに出ているが、生活は苦しく、一歳になろうとする子、小毛にミルクも満足に与えてやれない状態である。妻が勤めている農場の主任は、日本人であるが、現在主任の妻は、子宮の病気で入院している。主任は、妻がいないことを良いことに、鴛鴦に卑猥な言葉でモーションをかけて来る。このことを知り合いから聞いた阿榮は、そのことで気をもんでいる。一方鴛鴦は、主任に対して警戒しながらも、働き口を失うことを怖れて、主任の家で夕飯の支度をするのを余儀なくされている。ある日、主任の家で夕飯の支度をし終わった後、鴛鴦は、無理矢理に主任に酒を飲まされ、そしておかされてしまうのである。一晩中帰ってこない鴛鴦の身を心配して待っていた阿榮は、翌朝帰って来た鴛鴦をその場で問い詰め、彼女から朝帰りの経緯を聞くことになり、その衝撃のあまり杖を携えて家を出てしまう。そして、精神的混乱の後、われにかえった鴛鴦も、小毛を連れて家を飛び出してしまふ。その後、空になった阿榮の家に、汽車に向かって投身自殺をはかった阿榮の亡骸が帰って来ることになる¹³⁾。

まず大枠で、この男性主人公、阿榮の片足が無くなっている道具立てなど、日本帝国主義によって象徴的に去勢された被植民者男性の苦悩が政治的寓話として描かれていることに気づかされる。ここでさらに、鴛鴦が植民地台湾を表象する性的フェティッシュになっていることに注目してみたい。例えば、夫阿榮が妻の帰りを心配して懊悩する心理描写に、それは典型的に顕われている。

彼(阿榮)は、(鴛鴦が)主任のために食事の支度をするのは、ひとつの口実にすぎず、計画的な陰謀であるという疑心をもっていた。彼は、ぼんやりと想像した……「ええい、売女

め！」彼は、怒りもあらわに吐き捨てた¹⁴⁾。

こういった部分からも、このテキストの主要人物の配置というものが、「犯す男性」(日本人男性)／「犯される女性」(台湾人女性)／「去勢された男性」(台湾人男性)といった性的寓話のフォーメーションによって提示されていることが分かる。

興味深いのは、これ以後、別の作家が、この日本人男性のポジションに外省人男性を代入する形で、同様の構造を持つテキストが生産されていることである。「阿榮」が掲載されていたのは、第一巻第二期、1946年11月1日発行の号となっている。そして、この二つ後の第二巻第一期(1947年1月1日発行)の号と、三つ後の第二巻第二期発行(1947年2月5日)の号で、それぞれ「阿猜女」(張冬芳)、「冬夜」(呂赫若)という、「阿榮」のテキスト構造を反復させたような、「女性」を「台湾」に擬えた短編小説が出て来るのである。さらにこの二つのテキストと同形のものとして、1947年の10月に脱稿された吳濁流の「ポツダム科長」を加えることも出来る。この三つのテキストは、いずれも楊守愚の「阿榮」において日本人男性が占めていたポジションに、外省人男性が入り替わったものである。つまり、こういった日本植民地期におけるトラウマ的な寓話が、戦後(光復後)、独特の形で書き換えられているということなのである(「ポツダム科長」、「冬夜」については、後に詳述する)。

いずれにせよ、本省人男性にとって「女性」が奪われる表現とは、明かに彼らの無意識的な想像空間において、政治的主導権の挫折を暗示するものだと考えられよう。さらに、1949年以降国民党による権威主義体制の創出によって、本省人文学者男性にとっての「日本」は、徹底して周縁化されるに及んで、この後それは、トラウマ的な記号であるよりも、むしろノスタルジーの記号として潜在するようになる。このことを韓国との対比でいえば、韓国の場合には、朴正熙など、日本統治時代に日本側にいた人間が、その後韓国の権威主義的体制の中核を占めるようになって行ったがために、それを目の当たりにしていた民衆の中で根強く反日感情が維持され続けることになる。これに対して、台湾の場合には、国民党による権威主義的体制は、日本的な文化要素を徹底的に排除(脱植民地化)する中で、周縁化された本省系文学者にとって、「日本」というトラウマが、むしろノスタルジーとして温存されるようになった経緯として想定されるだろう。

第4節 ステレオタイプ化と脱植民地化

光復初期の社会状況を伝える文学テキストの中で、台湾文学史を語る上では最も言及されることの多い作家、吳濁流の『ポツダム科長』(1947年10月脱稿)¹⁵⁾を取り挙げてみる。『ポツダム科長』は、本省人の女性が外省人の男性に見初められ結婚するという、まさに当時有り得たかもしれない物語になっている。しかし、このテキストは、どう読もうとも省籍矛盾にかかわる性的寓話、あるいは文化的アイデンティティーの模索として読めてしまうものである。以下、『ポツダム科長』(原文日文)のあらすじを紹介する。

女性主人公、翁玉蘭は、喫茶店で偶然出会った大陸から来た接收員、范漢智に熱烈に言い寄られ結婚した。しかし、実のところ、范漢智は、光復以前の大陸で日本側に協力した「漢奸」であった。彼は、どさくさに紛れて台湾にやって来たわけであるが、不法な接收によって台湾を搾取し私腹を肥やそうとする汚職官僚だったのである。始めは、甘い結婚生活に浸っていた玉蘭であったが、夫漢智が一体どういう人物で、かつて何をしていた、また現在何をしているのか全く分らないまま、少しずつ夫に対する結婚当初の気持ちを失って行く。世間では、大陸の接收員による不法な接收や、汚職等が噂されている中で、玉蘭は、台湾人の祖国に対する失望に重ね書きするように、夫漢智に対する信頼を失って行くのである。そして、夫漢智にしても、最終的には、切りの良いところで、玉蘭を残して大陸に逃げてしまおうとも思っているのである。しかし、この作品の決着の付け方として、漢智は、既に大陸でのスパイ行為によって当局にマークされる人物となっており、台北駅構内で、別件で捜査していた捜索隊長に発見され、そして逮捕されてしまう。最後は、その捜索隊長による「四億五千万、どうしてこんなに漢奸や貪官が多いのだろう」という感慨によって締めくくられている。

このように『ポツダム科長』は、その頃の都市大衆の間で噂になっていただろう、数々の外省人に対する噂話や、その噂話が拡大したステレオタイプ——肯定的なステレオタイプ、そしてそれに替わる否定的ステレオタイプ——が入念に書き込まれた第一級の史料となるテキストとなっている。具体的に指摘すると、例えば、初めて出会った頃の玉蘭の眼に映っていた漢智は、以下のようなプラスのイメージで描写されている。

青年紳士はたいへん親切であった。台湾青年のようながさつなところはなかった。歯ぎれのいい国語、それに教養ゆたかな接待ぶり、ともすると玉蘭の心は乱れがちであった¹⁶⁾。…(中略)…流暢な国語で范新生即范漢智は来訪の挨拶をした。社交慣れした態度、油のかてか光る頭髮、身体にぴったり合った洋服など、今日はまたひとしおスマートに見えるのであった¹⁷⁾。

こういった肯定的なイメージの核にあるものの特徴を指摘すると、まず流暢な国語であり、また身につける服の趣味であったりするような、文化的な先進性である¹⁸⁾。しかし、この文化的先進性というものも、国語(北京語)が先に普及した大陸都市部の歴史的条件によるものであるが、それが范漢智への過大な評価へと繋がったと言えよう。そして、こういった玉蘭の漢智に対する肯定的なイメージが、テキストの後半において徐々に崩壊し始め、やがてマイナスのステレオタイプによって取って代わられて行くのである。

ここで注目されるのは、玉蘭の夫に対するマイナスのステレオタイプ化というものが、消え行く「日本」との隣接関係によって引き起こされている事態である。例えば、次のようなシーンは、日本人が引き揚げようとしている時期の台北の様子が巧みに折り込まれており、非常に興味深いものがある。

夫(范漢智)の興味は常に商売に関連しており、甘ったるい彼女の人生とは、およそ趣を異にするところがあった。それで、彼女は夫がこうして日本人の投げ売りをあざっているのを見ると、いやで苦痛さえ感ずるのであった¹⁹⁾。

この去り行く「日本」というテーマは、玉蘭が「日本」的な眼差しから范を眺める次のような描写において、さらに極まっているように見える。

…それよりもっといやなのは、靴をわざわざ持って上がり床の間に置くことであった。そればかりではない。靴を脱ぐことさえ忘れて鶏のようにそっと上がって来ることさえある。それが何となく教養がないように感じられるのである。それで彼女は一人がらんとした部屋の中にいると、そういうことがよけい頭のなかに拡がってくる。ちょうど蚕が糸を繰り出すようにつぎからつぎと出てくる²⁰⁾。

比喩として言えば、この時の玉蘭の眼差しは、(床の間のある)日本式家屋の側に一体化し、そこから夫を眺めていると言えるかもしれない。そして玉蘭は、日本式家屋の使い方をわきまえない夫に対して、「教養がないように感じ」てしまうのである。この小品「ポツダム科長」は、二・二八事件の同年、1947年10月18日に脱稿されており、改めて二・二八事件がもたらした歴史的暴力というものが、単に人的な被害だけでなく、如何に本省人の心象地図を転倒させたかという一端が知られるのである。

ただしこの時、玉蘭、あるいは作家呉濁流自身が、ネイションとしての「日本」に自己同一化してしまっていると即断してはならない。比喩的な意味においても、玉蘭が一時的に同一化しているのは、植民地時代が残したものであるとしての「家屋」なのであり、現にある日本国家に対してでも、ましてかつての支配者であった日本人に対してでもないだろう。さらに言えば、その「家屋」にしても、スタイルとしては日本式だったにせよ、それを建てるために労働したのは、そもそも本省人である。ある意味では、その「家屋」自身は、日本式のものであったとしても、それは既に「日本」に属するものではなく、脱植民地化というプロジェクトの側から記述するならば、むしろ「台湾」に属するものだとも言える。

ただし、この時の「家屋」は、台湾人の身体感覚の中に残っている、ある種の「名残り」を言い表わしているかもしれない。ただしその「名残り」というものも、現にある「日本」への志向性としてあるのではなく、むしろ自分自身の内部に向かうものとしてあるだろう。それは、范漢智を「他者」として表象し、それに一定の評価を与え、さらにその「他者」とともに生きて行くための「尺度」として呼び戻されてしまったもの、あるいは忍び込んで来たものである。つまり、玉蘭の言動が、時にノスタルジーを帯びることがあったとしても、基本的にそれは、「他者」を「他者」として認識するために、自己の過去の中にあつた何らかの材料を「他者」に向けて投射する、「他者」認識の実践の一環に他ならないということである。

とは言え、ある時は、「豚」のように貪り、またある時は、「鶏」のように部屋に上がって来る「教養がない」夫、范漢智についての表象は、明らかにステレオタイプに属するものである。も

もちろん、この「ポツダム科長」という小説について、外省人のステレオタイプが溢れたテキストだと判断するのは、ある意味では容易なことである。しかし、この呉濁流の創作実践の中には、ネガティブなものとしてのみ捉えるだけでは済まない、何かがある。つまり「ポツダム科長」は、潜在的なテーマとして、「外省人」とは何かという「他者」認識にかかわるドラマが、無意識下で演じられているテキストだと言うことである。そして、この「外省人」のステレオタイプ化にかかわって浮上して来てしまう「日本」をどのように脱植民地化するのか——これこそが、「ポツダム科長」の読解から延長されるべき、その時代が背負ったテーマだったと思われる。

こういった課題は、20世紀を通じて異民族間（エスニック集団間）の支配・被支配関係における心理的葛藤のあり様として、第三世界の解放にかかわる理論的営為の中で追求されて来たものである。先に引用したバーバによれば、「他者」にかかわるステレオタイプは、差異にかかわる知識を与えると同時に、それを覆い隠すものでもあった²¹⁾。つまり逆から言えば、ステレオタイプの形成とは、「他者」認識のための第一歩なのだとも言える。さらにバーバによれば、ステレオタイプの形成とは、自己のアイデンティティーと連動するものであるが、そのステレオタイプのイメージが「完全性」(fullness)を持つほど、むしろその「欠如」(lack)に脅かされるものだという。総じて「ポツダム科長」に言えるのは、第一に、光復直後のこの時期、お互いの同胞を理解して行く道行きは、未曾有の政治的経済的混乱によって、外省人を理解する余裕さえ持たされなかったということである（まさに外省人が「欠如」していたとも言える）。そして第二に、それ以上に重要なこととして、「ポツダム科長」という作品は、そういった困難な状況にありながらも、「他者」との出会いに直面した文学者が示した、無意識下の創作実践だったということである。

第5節 呂赫若における「女性」のポジション

1945年から1950年にかけて、台湾では、ポスト植民地期において浮上して来る文化的正統性の揺らぎ、あるいは文化的アイデンティティーの揺れというものが、種々見受けられたわけであるが、その中で出て来た「女性=台湾」というジェンダー化の契機について、さらに深く考察を進めてみたい。

植民地的表象と「女性」との結びつきを指摘した理論家として、まず念頭に上ってくるのは、前述したE・サイドである。サイドは『オリエンタリズム』の中で、小説家、ネルヴァルやフローベールのオリент体験を考察しながら、そこから浮かび上がって来る宗主国男性作家から見られたオリент（植民地）と「女性」の表象との翻訳関係を論じている。この中でサイドは、フローベールにおける植民地体験は、エジプトの有名な踊り子で、娼婦でもあるクチュク・ハムネとの出会いにおいて至福の瞬間を向かえる、と論じている。「クチュクは人の心をかき乱す豊穡性のシンボルであり、彼女の旺盛でいつ果てるともしれぬ性的魅力は、とりわけてオリエンタ的なものなのである」と²²⁾。このように、フローベールにとってのオリент（植民地）とは、豊穡性と性的魅力に彩られた「女性」と同義であるが、同時にこの「女性」は、「彼に対して何一つ要求しないように思われ」²³⁾るような、宗主国男性に対して従順な存在として描かれ

なければならないのである。

このようなサイドの指摘は、宗主国男性によって一方的に表象される植民地＝女性に対する批判であるが、光復直後の台湾における文学的営為において、台湾人男性文学者自身によって、台湾という場も「女性」の方へとジェンダー化が施されることになる（ただし、こういったジェンダー化の契機は、特に台湾に限ったことではない。女性の表象は、広く第三世界の文学作品の中で、抑圧される側の植民地住人の依存的性格、あるいは反抗的性格の比喩として広く用いられているものである²⁴⁾）。

先述したように、文芸総合誌『台湾文化』の1946年11月発行の第一巻第二期から1947年の第二巻第二期までの4期に渡って、実に三篇もの小説テキスト（「阿榮」、「阿猜女」、「冬夜」）が、台湾という場所を「女性」によって表象させているのである。

さて、この時期の台湾という場所を「女性」によって表象する作品パターンを論じた先行研究としては、游勝冠の「戦後台湾の反植民文学」（『台湾史資料研究（第3号）』1994/2 *原文中文）が挙げられる。以下、游勝冠による総括（原文中文）を瞥見してみる。

植民地統治の関係において、被植民者の地位は、実際、父権社会の中の女性と同様であり、彼ら／彼女は、被支配者の地位として同定される。植民者と男性の眼差しの中で、被植民者と女性の地位は、二流のものであり、同様にして植民者と男性の設定する価値領域の中でのみ、アイデンティティーの完成を追求するものである。だから、反植民地の言説と女性主義の論述は、常に相互に支援し合い、植民者あるいは男性が構築したイデオロギーを解体するのである。台湾が戦後中国の勢力範囲に入った時、直面した主たるものは、植民的支配の不合理であった。…台湾作家が創作した反植民支配的作品の中で、ある作家は、意識的あるいは無意識的に、被植民者と女性両方の身分を結合させ、外来統治者と台湾女性との性、あるいは婚姻関係をもって、同時に反植民意識的でもあり、女権意識的でもある小説を書いた。このような台湾作家は、外来統治者によって騙され、凌辱された女性を描いた。それは、彼ら（被植民者男性）を騙したり、凌辱したのが同じように外来の統治者であったからで、（女性は）植民地的支配に圧迫される台湾の象徴となった²⁵⁾。

游勝冠は、「女性」の表象を「植民地的支配に圧迫される台湾の象徴」と簡潔に述べている。このことについて、それに真っ向から異議を唱えるわけではないが、先のサイドの植民地＝女性という表象の享受にかかわる批判的観点から、台湾という場所を「女性」として表象することに関して、より構造的な分析を加えた場合に、また別の側面が見えて来るのではないだろうか。予想されることとして、「植民地的支配に圧迫される台湾の象徴」として被支配者集団の表象を「女性」に特化することとは、むしろ論理的には被植民者男性の被植民者女性に対する支配構造の正当性を担保し、植民地体制における支配の重層構造を無視するものではないか。つまり、そのような政治的寓話として書き込まれた「女性」は、1945年以降大陸から流入した国民党政権とそれに附随するエスニック・グループに対抗するために、本省系文学者男性のホモソーシャルな欲望を組織するものとして書き込まれた「記号」になっているのではないかということである。

このような仮説を補強するものとして、「女性」の表象が果してどのような経路を通して被植民者男性の欲望を組織するものであったのか、『サバルタンは、語ることができるか?』の著者、ガヤトリ・スピヴァックの議論を参照してみることにする。彼女は、文化人類学的な知見によりながら、以下のような論点を提出している。

非常に単純なレベルでは、明らかに、女性の交換によって血縁の概念は固定的になり、安定化すると言える。……すべての事例において、女性はサバルタン性もしくは反乱性の記号現象に関する統語的要素でありながら、無視されている²⁶⁾。

つまり、スピヴァックによれば、被植民者(ネイティブ)男性は、男性ホモソーシャルな連帯を実現するために「女性」を媒介として貶めようとする、「つまり、女性を道具として繰り返し彼女自身の意味を空虚化することに基づいて、共同体や歴史の連続性を生み出す」傾向がある²⁷⁾。ただし、スピヴァックの批判の力点は、被植民者(ネイティブ)男性にのみに向けられたものではない。彼女は『サバルタンは、語ることができるか?』の中で、サバルタン(下層の女性)が、植民者男性とネイティブ男性との間の敵対関係、その実は両者のホモソーシャルな相互連携に利用され、挟み撃ちにされ、その発言権を奪われ続けている事態の方を強調しているのである。

さて、こういった植民地文化における「女性」の表象をめぐる問題を、今一度、光復直後の台湾における文学的営為の歴史に投げ返した場合に、本省系の文学者の中では、ただちに呂赫若という名前が浮かび上がって来るように思われる。台湾文学研究者、陳芳明は、『呂赫若作品研究』(陳映真主編 聯合文学出版 1997年)の中の論文、「植民地与女性」(原文中文)の中で、以下のように呂赫若の達成を評価している。

身体政治(body politics)は、現在の植民地文学の議論の中で、常に重要な論点であった。女性の身体とは、結局帝国主義者の眼差しの中で「借用される空間」であるのか、それとも被植民者男性の眼差しの中での「固有の領土」であるのか?このような大きな懸案となっている問題は、まさに呂赫若小説の探索において密接な問いとなっている²⁸⁾。

陳芳明によれば、呂赫若こそ一貫して、光復以前より、日本帝国主義の植民地政策への批判と合せて、台湾内部の封建的体質(女性差別的体質)に向けた批判的視点を小説テキストの中に示し続けて来た作家ということになる。光復以前のテキスト、「牛車」「嵐の物語」「廟庭」「月夜」「婚約奇譚」「山川草木」などに触れながら、陳は、さらに以下のように呂赫若の意図を解説している。

台湾の主体性の回復、あるいは再構築にかかわる障害は、凡て植民地制度の存在に帰せられるものではなく、封建的父権体制という障害にも注意を向けるべきである。妻以外に妾を設ける問題は、植民地者(日本)が持ってきたものではなく、被植民者間の差別と抑圧であり、日本帝国主義がもたらしたものではない。呂赫若は、歴史の暗い霧を穿ち、一方では外来統治者の深層を描き出し、また一方では、台湾人が社会内部の実体を見ることを可能にした²⁹⁾。

ここからさらに詳しく呂赫若の作品の一つ一つについて分析が施されるべきだが、今回は、光復以後の時期を対象として限定しているので、『台湾文化』に掲載された短編「冬夜」を取り上げて論じることにしたい（「冬夜」は、彼の遺作ともなっている）。「冬夜」（原文中文）のあらすじは、以下の通りである。

主人公は、彩鳳という女性である。彼女の夫、木火は、日本の軍隊に取られてフィリピン戦線に配属され、音信不通となっており、光復後一年経ってもまだ戻らないでいる。結局、やむなく彩鳳は実家に戻り、父親の事業を盛り返すために、光復後、雨後の竹の子のように出てきた居酒屋に勤めることになる。そこに、浙江出身の商人、郭欽明が現れた。彩鳳を気に入った欽明は、彩鳳が帰宅する途中を狙って車で待ち伏せし、彼女を車に乗せ、騙して自宅へと連れて行ってしまふ。そして、郭は、ピストルで無理矢理せまって身体を奪ってしまうのである。一ヶ月後、彩鳳は、郭と結婚し、しばらく幸せに暮らしていたが、しかし半年後に、性病にかかってしまふ。郭は、彼女が密かに居酒屋に戻って、そこで身体を売っていたことが病気の原因だと断定し、離婚を要求し、また結納金三万元の返還を迫り、結局離婚することになった。病気から回復して来たころ、しかし彩鳳は、生活の圧力に屈し、本当に身体を売り始めることになった。そこで出会ったのが、狗春（王永春）という台湾人の男性である。彼は彩鳳にこのように身の上話しをしていた——光復以前、日本の軍隊に取られフィリピンの戦線に出ていたが、脱走しアメリカ側に投降し、日本軍と戦ったのだ、と。しかし、狗春は、現在、警察に追われる身となっている。ある夜、彩鳳は、狗春とその友人、またその相手をする女性たちといっしょにいたのだが、突然、警察に包囲されてしまった。捕まるのを怖れた彩鳳は、冬の夜の街へと独り飛び出して行くのであった³⁰⁾。

このテキストの前半部分、郭欽明によって彩鳳の身体が奪われる身振とは、大陸から来た国民党政権によって台湾が翻弄される寓話そのものであることが判明する。と言うのは、欽明は、彩鳳の不幸が日本帝国主義に由来するものであり、自分は、そのような不幸な彩鳳を救済すると明言しているのである。欽明は、彩鳳に対して以下のような、まさに政治的寓話以外の何ものでもない告白をし、そして最終的に彩鳳を裏切るのである。

なんて可哀相なんだ！お前の夫は、日本帝国主義によって殺され、つまりお前自身日本帝国主義によって虐げられたんだ。だが、安心しろ。俺は、日本帝国主義ではないし、決してお前を不幸せにしない。反対に、俺は、もっとお前を愛し、日本帝国主義によって虐げられた人を救う、これは、俺の任務なのだ。俺は、日本帝国主義によって蹂躪された台湾同胞を愛し、救う。俺は、台湾のために奉仕するのだ³¹⁾。

このようなアイロニーの強烈さは、ある意味では、吳濁流の「ポツダム科長」を越えたものであると言えよう。さらに「冬夜」が「ポツダム科長」と違う興味深い点として、途中までは、游勝冠が「植民地的支配に圧迫される台湾の象徴」と述べていたような彩鳳が、後半の離婚の後に

は、むしろそのような政治的寓話の磁場からはみ出すような主体へと変貌していることである。つまり「ポツダム科長」では、その読後の余韻として本省人男性読者による「女性」への「救い」の余地が残されているのだが、「冬夜」の後半の叙述においては、むしろそのような「救い」は、拒否されているように読めるのである。もちろんこのことは、離婚した後、彩鳳がむしろ女性として所有さえもされない境地へと転げ落ちてしまったことを意味するだろう。つまり彼女は、娼婦となることによって特定の「男性」の所有から脱しながらも、金銭によって女性を売買する男性社会全体によって抑圧されることになる。このように都市下層女性の方に向おうとしていた呂赫若の眼差しは、光復直後の政治経済的混乱を引き受けざるを得ない女性にかかわる描写として、極めて貴重なものではないだろうか。

さらに、テキスト構成の水準でも、「冬夜」には、特異な仕掛けが解されている。それは、性病の原因の経路について、暗に欽明経由であることが読解のレベルで判断されるものの、あくまで、沈黙によって非決定なままにされていることである。つまり、その感染経路(悲惨の由来——本省人男性?外省人男性?)について主張できない彩鳳の沈黙とは、暴力に対して異議申立てできない沈黙を強いる暴力、つまり女性にかかって来る二重の暴力を仄めかしているのではないだろうか。欽明と離婚し、病から癒されていく彩鳳は、そこで次のような内的発話を生み出す。

彼女は、取り止めもなく考えていたが、社会は、こんなにも無情で、郭欽明もあのように酷く陰険で、自分は何をやっていたんだらう、とわれにかえた。彼女は、全く苦痛というものはなかったが、ただ今後どうやって生きて行くのか考えるばかりであった。だから、病気が直った後、彼女は、また居酒屋にもどったのである。「素麺」ばあさん(客引き)とある種の関係を始めたのは、このころだった。彼女は、全く後悔していなかったし、自ずとこの道を歩むことになっていった。第一に、彼女は、郭欽明によって無実の罪を着せられた後、男は、信じるに足るものではないという結論に達した。第二に、実家の両親は、例の三万円の返済を迫られた後、万元単位での借金を強いられることになり、現在の生活を維持することが難しくなり、こういったことは、全て自分がもたらしたものであり、だから、彼女も、どうしようもないことと感じていた³²⁾。(括弧内傍点引用者による)

「彼女は、全く苦痛というものはなかった(毫無所謂痛苦)」と叙述されている。ここで呂は、彩鳳には苦痛が無かったと説明したかっただけなのだろうか。逆しまにこの文を読解するならば、この「全く苦痛というものはなかった」という否定形の文は、むしろ過剰に「苦痛」の予感を浮かび上がせるものである。つまり、彩鳳の苦痛とは、むしろ無感覚となるほどの苦痛だったという読みも可能だと思われる。「彼女は、全く苦痛というものはなかった」と書きこんだ呂は、図らずも、その苦痛の表象不可能性をも書き記しているようである。つまりここには、沈黙を強られる女性の内的発話と身体感覚との分裂が刻印されているわけである。

この部分から言えば、少なくとも游勝冠による「植民地的支配に圧迫される台湾の象徴」としての「女性」——このような単純な構図では済まされない何かがある。游勝冠のような議論は、むしろ家父長的文化コードに沿って表象される「女性」を強化し、「女性」を(異性愛者)

男性の政治的想像空間を充填する記号に貶めてしまうものではないだろうか。対照的に、ポスト植民地期において、むしろ強められてしまうネイティブの家父長的文化コードに抗しつつ、女性の身体それ自体に語らせようとした呂のエクリチュールは、まさに別格のものとして注目に値するものではないだろうか。彩鳳という形象は、夫に所有されるべき「妻」や「母」の貞淑さに囲い込まれることもなく、また娼婦となりながら、植民地的表象として消費される「娼婦」的妖艶さとも無関係である。しかしそのことは、繰り返しになるが、決して彩鳳が自らの意志によって男性の所有を脱したということではなく、むしろ所有さえもされない状態にあるということ——そのプロセスとして、呂赫若は、「娼婦」という男性文化の究極的な病理の穴へと女性が追い詰められて行く軌跡を浮かび上がらせたわけである。

しかし、まだ疑問は残る。他の作家の女性像が、何がしか男性中心主義的な無意識の欲望に要請されたものであるのならば、呂が「冬夜」を書いた欲望とは、一体どのようなものだったのか。光復が失望へと変わって行く当時の本省人男性文学者には、台湾は宿命的に植民地状況ではないか、という感覚が確実にあっただろう。そして、同時にこの自己を植民地として見る眼差しは、ある程度「女性」のフェティッシュ化に転移してしまうはずである。

しかしそこからこそ、他者の発話とどのように関わって行くかという課題が生まれても来るのではないか。ミハイル・バフチンによれば、書き手によって取り入れられた「他者」の発話は、従属・同化されながらも、その他性の痕跡を否応無くテキストの中に残してしまうものである³³⁾。そこで「冬夜」の彩鳳の内的発話、「彼女は、全く苦痛というものはなかった」という部分とともに、「男は、信じるに足るものではないという結論に達した(造成一個男人不可信之結論)」という部分を焦点化してみよう。さて、この「信じるに足るものではない」という発話の宛先は、果たしてどこに向いたものなのか。外省人であるのか？ それとも男一般であるのか？ 当然、彩鳳を主語とするこの発話は、呂という発話行為の主体によって支配されているものである。ただし、ここをまた逆しまに読むならば、この否定形を伴った「信じるに足るものではない」とは、「信じるに足らぬ」その当の男性作家、呂の方へとも転移した、内なる他者としての女性の「声」の痕跡とも言えるのではないか³⁴⁾。この「信じるに足るものではない」という言葉の宛先は、当然植民地的な支配を台湾において行使する支配者たちに差し向けられながら、さらには、女性に二重三重に振りかかる抑圧構造に加担するネイティブ男性の側にも向けられたものであろう。つまり、女性をフェティッシュ化する方向で描くのではなく、呂は、むしろ都市下層女性に振りかかる重層的な敵対性に着目し、それを台湾のポスト植民地体制における家父長文化への異和へと組織しようとしたのではないだろうか。

*

呂赫若の前後の経歴から、呂赫若が反帝反封建の立場から女性問題を独自のテーマとして取り上げようとしていたことは確実なことである。例えば、光復以前、呂赫若が書いたエッセイで「媳婦仔の場合」という小品がある³⁵⁾。この中で呂赫若は、幼い頃から結婚を前提として息子の世話をさせる養女(媳婦仔)の問題を取り上げている。当時の媳婦仔は、台湾における(植民地的)近代化の進展とともに、将来の夫が都会に学業を修めに行くなどの生活環境の変化から、家

に入ったは良いが、その役割を宙吊りにされてしまっていたのである。呂は、そのような媳婦仔の存在に焦点を当てながら、そのその存在の両義性(アンビバレンス)を論じているわけである。さらに、戦後に眼を移せば、1947年の段階で、経済的にも切迫した状態が台湾を包み、政治的な危機が囁かれている中で、呂は、雑誌『新新』(第8号1947年新年号)において「未婚女性座談会」³⁶⁾という座談会企画の座長を務めるなどの活動も行っている。呂は、いわばジャーナリスト的なセンスにおいても、二・二八事件、それに続く白色テロに巻き込まれて亡くなる(1951)など、政治的危機に巻き込まれなければ、光復以後の脱植民地化のプロセスにおいて、その豊かな才能を開花させたはずだったのである。

そのことは、呂が、他の作家のように貞淑な妻や母を前提とせず、むしろ居酒屋で働く都市下層女性労働者に照準を当てたことの中に確認できるものである。この当時、酒家が雨後の竹の子のように林立し始める様子は、例えば、池田敏雄氏の「敗戦日記ⅠⅡ」などにも出て来るこの時期独自の現象でもあった。当時の台湾社会(1946～49年)は、千倍もの高インフレ時代を通過しており、だからこそ、その中で甘い汁を吸った汚職官僚やそれに群がる成り金商人の出現によって、むしろ飲食店、酒家などの徒花的な繁盛を目の当たりにしていたわけである³⁸⁾。従ってそこで働く都市下層女性労働者とは、銀行預金や筆筒預金も含めた全ての貨幣価値が、千分の一になっていく現実の中で、男性とはまた位相を別にするもう一つの現実を構成していたわけである。つまり、この時期の酒家とは、そのような転げ落ちてきた台湾人女性とにわか成り金になった男性(省籍を問わず)とが会う、当時の社会的混乱が凝縮したような社会的病理の穴であったわけである³⁹⁾。

こういった状況の中で、もちろん時代的な限界は有りつつも、呂は、当時の本省人男性作家としては、最も女性の「声」に隣接させた表現を行っていたと言えるのではないかと。つまり、呂における彩鳳は、男性にとって貞淑で従順な「寡婦」でもなく、またあのフローベールの植民地的記号としての自由奔放で妖艶でな「娼婦」でもない。つまり、植民地的状況ともいえる多層な経済的暴力がどのようにネイティブの都市下層女性を追い詰めて行くのか、彩鳳は、そういったポスト植民地的男性文化の病理の穴を炙り出すための、不安定かつ不透明な存在として描かれているのである。自身の身を売るはめになった時の彩鳳の述懐には、「第二に、実家の両親は、例の三萬元の返済を迫られた後、萬元単位での借金を強いられることになり、現在の生活を維持することが難しくなり、こういったことは、全て自分がもたらしたものであり…」という部分がある。つまり、彩鳳を取り巻くのは、下層労働者の世界であり、家計を支えることを期待する家族の世界であり、また離婚した女性一般に対して負の刻印を与える家父長的社会…等々、植民地的体制が女性に自己犠牲と搾取を強いる重層的暴力の地図そのものである。このような不安定で両義的(アンビバレント)な女性の存在を、男性植民地文化を再生産する空虚な記号ではなく、(ポスト)植民地的な抑圧の重層的な力学を炙り出すためのもう一つの「声」として提出すること、これこそが呂赫若にとって求められるべき脱植民地化の方法だったと言えよう。

結びに代えて

以上、駆け足で1945年から1949年までの脱植民地化の課題を軸にして、台湾の文学的営為の中に現れた台湾＝女性の表象をめぐる分析及び考察を行って来たわけであるが、植民地文化を議論する場合の必然性として、そこにジェンダー的な契機を導入した場合に、植民者－被植民者といった単純であった力関係（ヘゲモニー）が、不可避的に輻湊することになる。しかし、そういった問題の複雑さ、解き難さを放置することはもはや出来ないだろう。それは、現在においても、台湾の文化的状況というものが（これは日本においても）、不断に歴史の忘却と新たな記憶の再構築によって定義され続けているからである。つまり、ポスト植民地期（日本においては、帝国主義日本の捉え返し）において、ジェンダー的な契機は、スピヴァックが「女性を道具として繰り返し彼女自身の意味を空虚化することに基づいて、共同体や歴史の連続性を生み出す」と指摘した、ポスト植民地体制における男性中心主義的な文化権力に対する批判的考察の方に絶えず立ち戻ることを私たちに要求し続けるものである。

さて今日、台湾における省籍矛盾というものが、世代が下って行くにつれて徐々に沈静化しているとも言われている。つまり、既に何がしか外省人は本省人化してしまっており、また本省人も外省人化してしまっているわけである。これは、いわば二重の生成変化とも呼べるものではある。しかし、相変わらず選挙の場面などでは、言語の種別性とともな、省籍問題が、いまだに大きく投票行動に影響を与える情動的モメントであり続けていることも確かなことである。

本稿は、そういった二重の生成変化を常に抑圧し、省籍矛盾を反復する欲望の中に台湾＝女性という契機を見ようとして来た。さらに言えば本稿は、支配／被支配の関係をジェンダー化することによって得られるポスト植民地的な力関係（ヘゲモニー）の構図が、光復直後の男性文学者（本省系、外省系を問わず）の言説空間において、「女性」という表象の利用と、それとは裏腹の現実に生きている女性の「声」の隠蔽に繋がることをも示そうとした。端的に「父なる孫文」「父なる毛沢東」といったようなジェンダー的な契機が、依然として中華圏の政治文化総体を規定し続けていることこそが、実は、ポスト植民地期、あるいはポスト冷戦期における文化実践にとっての重要な課題の一つであることを、今後とも稿を別にして追求して行きたい。

注

- 1) 『台湾文化』——1946年9月15日に台北において創刊され、それ以来4年に渡って発行された。主編に著名な歴史学者楊雲萍等を迎えた台湾文化協進会の機関刊行物ということで、当時の台湾に住むインテリ文学者に大きな影響力を持っていた雑誌である（下村作次郎『文学で読む台湾』田畑書店1994年 pp.166-187参照）。
- 2) 四、六事件——1949年4月9日、台湾大学と師範学院の学生、200名余りが、警備総司令部によって逮捕される事件。この事件と連動して、新生報「橋」副刊の歌雷、楊達なども逮捕される。1949年に降激しくなっていく白色テロのはじまりを告げる事件と言われている（藍博洲『天未亮』晨星出版2000年、参照）。
- 3) ジョーン・W・スコット『ジェンダーと歴史学』荻野美穂訳 平凡社 1992年 p.75。
- 4) ジョーン・W・スコット「ジェンダー再考」荻野美穂訳 『思想』岩波書店1999年4月号 p.11。

- 5) ミッシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ』 p.194.
- 6) 邱貴芬「女性的「郷土想像」, 『認同・差異・主体性』 立緒文化 簡瑛瑛主編 1997年 pp.2-28.
- 7) エドワード・サイード『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳 1993年 p.166.
- 8) 松永正義「台湾文学の歴史と個性」, 『彩鳳の夢』 研文出版 1984年 p.214.
- 9) 筆者不祥「国軍を台北駅頭に迎ふ」, 『新新』創刊号 1945年11月20日 p.2 (歴史的かなづかいは、適宜、現代かなづかいに改めた).
- 10) 葉石濤『台湾文学史綱』文学界雑誌社 1996年 p.70.
- 11) Homi K. Bhabha *The Location of Culture* Routledge 1994 pp.75-77.
- 12) 楊守愚「阿榮」, 『台湾文化』 第一巻第二期 1946年11月5日 (原載『台湾新文学』第一巻第十号 1936年12月5日).
- 13) 楊守愚, 前掲書 pp.23-29.
- 14) 同上 p.24.
- 15) 吳濁流「ポツダム科長」, 『泥濘に生きる』 社会思想社 1972年 (初出 私立大同工職打人情会出版, 台北学友書局出版 1948年5月. 脱稿したのは、1947年10月8日と記されている).
- 16) 吳濁流, 前掲書, p.192.
- 17) 吳濁流, 前掲書, p.195.
- 18) フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武, 加藤春久訳 みすず書房 1970年初版.
ファノンは、黒人の男が白人の女性を愛し、黒人の女性が白人の男性を愛する現象を分析し、そういった言説の中で皮膚の白さが、いわばフェティッシュとして享受されるモメントを抽出した。
「白人の女が私を愛するならば、彼女は、私が白人の愛に値するものであることを証明してくれることになる。私は白人のように愛されることになる。私は白人となる。」(p.85).
- 19) 吳濁流, 前掲書 p.232.
- 20) 吳濁流, 前掲書 p.230.
- 21) Homi K. Bhabha, “The Other Question : Difference, Discrimination and the Discourse of Colonialism” in *The Location of Culture* (日本語訳は、上岡伸雄訳「差異、差別、植民地主義の言説」, 『現代思想』青土社 1992/10 p.72 を参照).
- 22) エドワード・サイード, 前掲書 p.428.
- 23) エドワード・サイード, 前掲書 p.427.
- 24) Rhonda Cobham, “Misgendering the Nation : African Nationalist Fictions and Nuruddin Farahs Maps,” in Andrew Parker & Patricia Yaeger, eds., *Nationalism and Sexualities*, New York : Routledge, 1992.
ロング・コバームは、アフリカのポストコロニアル文学において、宗主国植民者の侵入によって破壊された生活体系を「自然」のカテゴリーとして表象化する際に、女性の表象が、生活の再生産を担う主体として選ばれることを指摘している。さらにその際に、書く主体としての作家(男性)は、西欧の影響を受けた土着エリート男性(ヘテロセクシャル)であることが、無意識の前提として指定されると指摘している。
- 25) 游勝冠「戦後台湾的反植民文学」, 『台湾史資料研究』第3号 1994年2月 pp.105-106.
() 内、引用者補充.
- 26) ガヤトリ・チャクラヴォルティー・スピヴァック「サバルタン研究——歴史記述を脱構築する」, 『サバルタンの歴史——インド史の脱構築』所収 R. グハ, G. パーンデー, P. チャタジー, G. スピヴァック, 竹中千春訳 岩波書店 1998年 pp.332-333.
サバルタンとは、アントニオ・グラムシによって、公的な場での発言権を持たない下層エスニックグループを指す用語として定着したものであるが、ここでのスピヴァックの使い方では、主にインドの都市における下層女性労働者を指すことになる。

- 27) ガヤトリ・チャクラヴォルティー・スピヴァック, 前掲書 p.337.
- 28) 陳芳明「植民地与女性」, 『呂赫若作品研究』 主編 陳映真 聯合文学出版 1997年 p.249.
- 29) 陳芳明, 前掲書 p.263.
- 30) 呂赫若「冬夜」, 『台湾文化』 第二卷第二期 1947年2月5日 pp.25-29.
- 31) 呂赫若, 前掲書 p.28.
- 32) 呂赫若, 前掲書 p.28.
- 33) M・パフチン/V・N・ヴォロシノフ『マルクス主義と言語哲学』 桑野隆訳 未来社 1976年. 以下, pp.173-174からの引用.
 「みずからの成分のなかに別の発話をとり入れた著者の発話は, その部分的同化のために, すなわち著者の発話のシンタクスの, 構文的, 文体論的統一体に属させるために, シンタクスの, 文体論的, 構文的規範をつくりあげるが, 同時に, 痕跡的な形であれ, 他者の発話がそれなしでは十全に理解されないところの, 他者の発話の(シンタクスの, 構文的, 文体論的)最初の自律性も保持している。」
- 34) ガヤトリ・チャクラヴォルティー・スピヴァック「サルタンは, 語ることができるか(下)」上村忠雄訳 「みずす」448号 1998年7月.
 以下 p.40からの引用.
 「デリダはラディカルな批評を同化によって他者を領有する危険ということでもってマークしている. かれは起源におけるカタクレーシス [濫喩] を読み取っている. かれはユートピア主義的な構造的衝動を『わたしのなかの他者の声である内なるうわ言をいわせること』というように書きなおすことを要求している。」
- 35) 呂赫若「女息婦仔の場合」, 『民俗台湾』3巻11号, 1943年11月1日(初出)(本稿で参照したのは, 以下の版. 『呂赫若小説全集』林至潔訳 聯合文学出版 1995年7月 pp.567-568).
- 36) 呂赫若その他「未婚女性座談会」, 『新新』第8号 1947年 新年号 pp.10-13.
- 37) 池田敏雄「敗戦日記Ⅰ」「敗戦日記Ⅱ」, 『台湾近現代史研究』 台湾近現代史研究会編 第4号 緑蔭書房 1982年.
 1945年10月7日付けの日記には, 以下のような箇所が記されている.
 「またこの一日の間に, 露店, 飲食店などの続出せるには驚く. 空地という空地に, すべて露店小屋建つ, 大料理店の開業と共に, 暫時自滅せん。」(p.106).
- 38) 台湾資料編纂小組『台湾歴史年表 終戦編Ⅰ』業強出版社 1995年 p4.
- 39) 当時, このような居酒屋の林立を目の当たりにして, 1946年6月20日, 行政長官公署は, 「旅館女侍管理辦法」を公布し, また八月末までに公娼を廃止することを声明している. また翌21日には, 民政庁が「禁舞廢娼辦法」を決定している.